

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2025年2月 NO.238



[もくじ]

- 2～3 ロサンゼルスと高知で興すミックスカルチャー…都筑正寛
- 4～5 タップダンスと二人三脚…松岡映里
- 6～7 Atelier ironoie アトリエ 色の家…川村 愛
- 8～9 二〇二四年に読んだなかでいちばん大好きな本はこれです…山中由貴
- 10 いつでもどこでも自然観察…坂本 彰
- 11 「アンテナ」泳げドラゴン〈入水編〉…下尾 仁
- 12 新・祝祭音楽劇「小さな星の王子さま」―制作の現場から―
- 13 高知市文化振興事業団10～12月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

ロサンゼルスと高知で興す ミックスカルチャー

都筑 正寛

若い頃から、バンドや地元の仲間と遊びながら、外国、移民文化に触れる機会が多かったこともあり、海外での生活に憧れていた。二十代はじめ、アメリカ東海岸に移住した友人家族から、働きに来ないか？と誘われた時は、即答で行くことを決めた。ただ若さゆえ飛び込んでいったので、いろんな予想外のことがおきて、不本意ながら、二年半で帰国することになった。帰国後、三年半くらい働きながら、当時の環境を人のせいにはかりして自分でやれることをしていなかった、そんな不甲斐なさを痛感し、もう一度、再渡米することにした。今度は全て自分の意思と責任で。自分のやりたいことをしたい場所で挑戦しよう。音響技術、音楽製作を学

び、いつかは、ライブミュージック、製作を楽しめる場所を作ろうと。一九九九年にロサンゼルスに移住。英語学校の後、レコーディングスクールに通った。

学校修了後は、スタジオのインターン・アシスタントからスタート。その状況では生活費が稼げるわけはなく、飲食店のバイトもしつつ、空き時間にはクラブに通い、ワールドミュージックやジャズ、ファンクなどのライブから影響を受けた。そして、スタジオやクラブで知り合ったミュージシャンたちと練習セッションをするようになった。しばらくして、メイソンのエンジニアができるようになり、バンドのツアークルーにもなることができた。現場で知り合った仲間の繋がりで仕事が少しずつ

増え、音楽の仕事だけでなんとか暮らせるようになった。

それからツアーの仕事が増えていき、様々なジャンルのバンドのクルーとして、音響、テク（楽器のセットアップ・管理）、ステージマネージャーなど、その時によりいろいろな職種を経験し、アメリカ、カナダ、メキシコ、ヨーロッパ、オーストラリアと世界中のフェスティバル、クラブ、劇場で働く機会を得た。バンドのツアーを優先し、ツアーのない時に、レコーディング、イベントPA、仲間との製作活動などをしていた。地元ミュージシャンの溜まり場のようなジャズクラブでも働くこともでき、ロサンゼルスを拠点にするアーティストとの繋がりがさらに増えていった。

その環境の中で感じたのは、多くの人種、宗教が存在する世界で、皆それぞれのアイデンティティ、ルーツを大事にして、互いの培った文化を理解して、新しい音楽を

作っていく、アレンジしていく姿勢だった。歴史的にも、戦争や侵略、民族移動により、滅んでしまった文化・文明もある一方で、原住民と移民との文化の融合で新しい文化が生まれている。現地の民謡、楽器と移民が持ってきたリズムで新しい音楽が生まれたり、現地の野菜・作物と海を渡ってきたスパイスで新しい料理ができたりしている。ロサンゼルスでの音楽漬けの生活で、ミックスカルチャーの原点、精神を学んだ。

しばらくして、今後の生活拠点を日本にしようと考え、帰国移住場所探しをはじめた。ロサンゼルスでの経験をいかした、音楽と食での橋作りを念頭に活動できる場所を求め、日本各地を旅していた時、友人に誘われて高知に来た。ただ誘われるがまま来たのだが、待ち合わせをした日曜日に圧倒された。いろんな偶然から、生産者、シェフ、レコード屋オーナー、ジャズ喫茶マスターから話を聞くことができ、皆さんの親切、ギビング

精神に感動し、まず高知でやってみようと決意。二〇一八年三月に移住し、それから一年間チャレンジショップでレコード屋をやった。マニアックな作品ばかりだったが、「ここで売っている音源は、今ロサンゼルスで活動しているアーティストで、できたら高知に呼びたい、ロスに行ったら気軽にライブ見に行けるよ」というメッセージがあった。

そして、二〇一八年十一月、知り合いのプロモーターから誘いもあり、日本ツアーの一環として、イーストロサンゼルスバンドのライブを竹林寺書院で主催した。オープンニングは、竹林寺僧侶の声明と高知ミュージシャンの即興ジャム。ロスから来たバンドメンバーもぶっ飛んでいた。チケットも完売し、ライブも盛り上がり、バンドメンバーが高知を好きになってくれた。そして、二〇一九年十月には、日高村の酒蔵ホールで、ロスのアーティストのジャズ・アンビエントのライブを主催。彼ら

が出演するフェスティバルに連動する形で、高知でもライブがしたいと依頼され、フェスティバル主催者の了承協力のもと企画。こちらも高知のミュージシャンにオープニングをお願いした。四国各県はもとより、岡山からも来場者があり、公演は盛況。このアーティストたちも高知を気に入ってくれた。一人は、その後プライベートでも高知に遊びに来てくれるよう



ロスの友人ミュージシャン El Haru Kuroi のコンサート (竹林寺)

になった。彼も高知の人の、迎え入れる懐深さ、優しさ、居心地の良さを感じたのだと思う。

実は、高知に来てからずっと思っていることがある。それは、年に一回、ロスのアーティストを招いてのフリーコンサートイベントをやることだ。文化振興交流、地域活性化を目的に、街やNPOなどが主催、地元企業が協賛し、人気のあるバンド、アーティストを招聘したフリーイベントが世界にはある。私もロサンゼルスやシカゴでのフリーイベントで働いたことがあるが、毎年恒例で地域に定着していることもあり、家族連れが多く、子供たちも大人と一緒に楽しんでいる。会場には、地元のフードブース、雑貨店が並んでいる。そんなイベントを高知でできないだろうか。子供たちにとって、イベントを通じて海外のライブミュージック、異国の芸術文化に触れる機会になり、自然と経験の種を蒔く機会になって、その種、思い出が、記憶が、興味に、未来

につながっていく。幼少の故郷の思い出がどこかで音楽をきっかけに蘇る。記憶が積み重なって、次世代へと続く故郷愛、高知愛、アイデンティティにつながっていくのではないだろうか。

つづき まさひろ

一九七一年 神奈川県生まれ。
ロサンゼルスで約二十年、音楽製作、ツアークルー、クラブマネージャーに携わり、二〇一八年帰国、高知移住。

ロスの音楽、タコスを紹介するチャレンジショップからスタート。音楽やタコスのイベントで繋がりを作り、日高村の地域おこし協力隊などを通じ、音楽、食文化を通じて地域づくりを念頭に活動。ロサンゼルスアーティストも召集、また、高知の地きび（硬粒種とうもろこし）を使った自家製コーントルティーヤのタコスを日曜市、キッチンカーなどで紹介、販売を行う。ロサンゼルスと、高知の音楽・食文化をもとに生まれるミックスカルチャー活動を続けている。

タップダンスと二人二脚

松岡 映里

私はタップダンサーです。踊ったり、教えたり、舞台を作ったりして生活しています。よく、「タップって資格はあるのですか?」「コンテストとかは?」と聞かれます。特にありません。タップは、

ダンスの中でも最も難しいジャンルのひとつと昔から言われる上に、練習は地味で人口も少ないです。けれど、とてもお洒落でかっこいいダンスです。

人生で踊ることを始めたのは中学生から。もとは、母がジャズダンスを習っていて、レッスンがある日は稽古場に連れられ、片隅で終わるのをひたすら待っていた保育園時代。全く興味を感じませんでした。が、小学三年生の時、ダンス教室の大きな公演があり客席に座りました。この時の衝撃という

んな感情が今の軸になっています。マイペースな小学生が舞台に憧れを持ち、中学受験を無事終えたタイミングでダンス教室について入会しました。

はじめは週一回のペースで習い、あれよあれよとタップダンス、少しバレエ、中学の部活も舞踊部（今のダンス部）に、児童ミュージカル劇団とすっかりその世界に入り浸り。なのに練習はあまり好きではなく、できないことがあっても何のそので、家でゆっくりお菓子を食べながら漫画を読むのが至福の時。こんなパツとしない学生ダンス時代でしたが、高校を卒業するタイミングでタップの先生がかけてくださった言葉をきっかけに、道が開けていきました。

通っていた教室以外のレッスン

を受けに行き始めたり、講師のアシスタントをしたり。先生方のおかげでいろんなチャンスに恵まれ、気がつけばタップ講師として指導、振付、舞台制作に携わったりと、少しずつ作る側にまわっていきました。

二十代は、高知で講師として活動しつつ、東京にアシスタントに通いました。レッスンを受けたたり、老舗のタップダンスカンパニー公演に出演しました。そして一度東京に住もう!と決意し上京。アルバイトをしながらレッスンに舞台出演にと慌ただしい生活を三年続け、高知に帰って参りました。

もともと、将来はタップダンスの楽しさ、素敵さを地元高知に広めたいと心に思っていました。これから好きな振付をたくさん作って、仲間と踊れる!その一心で、着陸間際の飛行機から見下ろした太平洋の風景は忘れられません。

高知に帰って少し経った頃、先生からタップ教室を受け継ぎ、主宰として運営することになりました。そして数年後、東京でカンパニーの後輩だった人物と結婚しま

した。石川県出身で、同じく東京へタップ修行に来ていて知り合い、高知に移住してくれました。この夫が大のタップ人間で、考えや方向性が合う合わないは日常茶飯事です。が、共に活動していくうちに少しずつイベントやライブ等に出演する機会が増えていき、確実に高知にタップが広まっていきました。

そんなある日。一本の電話が私にかかってきました。なんと日本を代表するタップダンサーからでした。数年前にイベントで一緒にして以来。非常に驚き、心臓バクバクで受話器（ボタン）をあげる

筆者



2024年 タップダンス公演「羽音る」より

本のタップダンスの現状とともに、もっと各地のタップダンサー達で協力して、一般にタップを観てもらえる機会を作ろうやないか！という内容でした。かの有名な映画「座頭市」にタップシーンのメイソックスとして出演されていた方ですが、じっくりお話しする中でひとつも曇ったものがなく、これはありがたい機会だと感じられ「ぜひやりましょう！！！」とお

返事しました。そうと決まれば、早速ホームページで高知の劇場を検索。たまたま空いていた会場を仮予約。数日後に「劇場おさえた！舞台公演やりましょう！」と一気に動き出したのです。本番は半年後。

冒頭に書いたように、タップ人口は少なく、タップのみの舞台なんてやった事のない高知。教室の生徒さん達にも、舞台とは、公演とは、タップとは、というところからのお話が必要でした。単独で舞台を打つ経験も初めての自分。皆の多大な協力があり、七年経った今でも『1』ONE（土佐の大地に足音響け！）は、観に来てくださった方々から、本当に感動したという声を頂いています。生涯忘れられない舞台となりました。

この公演ののち、韓国の済州島、石川県金沢市、福井県勝山市へと高知から仲間と共に行くタップダンス行脚の機会に恵まれるようになります。私が夢に描いていた田舎から芸術を発信するということが、明らかに形になっていった



筆者（中央）

のです。代表する演目に、仁淀川をモチーフにした既存の曲にタップの音と動きをつけた、私達が最も大切にしている「かぜこぎ」という作品があります。自然豊かな故郷高知への想いを注ぎ込み、一音一音心を込めて踊る。観る人にも風や水や風景が感じられるように。初演から踊り手が変わっていても、大事にしているものは現在も受け継がれています。

そして二〇二四年。夫の故郷石川県に居を移しました。能登にタップを根付かせたい。その想いを叶えること、そしていつかまた

『1』ONEのような舞台を大陸と四国の生徒全員と共に作り上げること。信頼する若い指導者ふたりに土佐タップを預け、日本海と太平洋を行き来する生活が始まりました。

地方の芸術の力を信じています。何もないところに根を張ることの大変さゆえに、今、このふたつの地にいることを誇りに思います。タップダンスと二人三脚。これからどんな音が響いてくるのか、ワクワクしながら大地を踏み鳴らしています。

まつおか えり

一九七九年 南国市生まれ。
十二歳よりジャズダンス、タップダンスを始める。十九歳よりタップ講師として児童劇団やダンス教室にて振付・指導にあたる。
二〇〇一年より東京のTAP INにてタップを加藤邦保氏に師事。
同氏率いるJAM TAPDANCE COMPANY公演など多数出演（東京芸術劇場、あうるすぽっとなど）。
現在、タップダンサーとして高知県・香川県・石川県で活動中。

Atelier ironoie アトリエ 色の家

川村 愛

ひんやりとした空気の中にも、暖かい日差しに恵まれるようになった頃。「あいせんせーい!!」と呼ぶ声が出て、カーテン越しに外に目をやると、子どもたちの姿が。時計を見ると三時過ぎ。アトリエのオープンとは三時半。「まだでー もうちょっと待ちよって!」と遅い昼食をいそいそと食べ終えて、オープンの準備をする。朝からお昼過ぎまで、私立の小学校の図工専科講師として働いているので、片付けと準備、昼食、そしてアトリエ。あっという間に時間が過ぎていく。

高知市福井町に「アトリエ 色の家」を構えてこの二月で三年目に入る。ここは、子どもたちの放課後絵画造形教室。主に小学生が来てくれている。築五十年の平家の一軒家は、今では珍しい木枠の窓に網戸、畳の床間、縁側、窓ガラスの模様がレトロで可愛らしい、昔ながらのおばあちゃんちのような昭和の一軒家。そんな和やかな雰囲気「アトリエ 色の家」では、描くことやつくることを通して、「子どもたちの居場所づくり」をテーマに「自由な発想・主体的な行動、そして豊かな感性」を育む場として、また、異年齢の子どもたちが集まり、個人制作から共同制作まで、互いに同じ空間で取り組むことによって、「コミュニケーションが発達し、違いを知り、理解や分からないことも認め合い、共に成長していく場所」にもなっている。子どもたちが描きつくる中で、人やモノや素材と関わり、生まれる気づきや気持ち、考え。それらがひとりひとりの行動となって、表れ、交わる。そのようなひとつひとつが集まって、アトリエという場所をつくっている。ひとりひとりが主人公なのだ。

【アトリエの風景】

～ゆずさんが卵を産んだ～

アトリエオープン当初からのメンバー・ゆずさん。彼女はオカメインコ。アトリエと同じ年の三歳になった。ゆずさんが秋に卵を産むことがある。子どもたちは卵に感激して、「うわ～! タマゴうんじゅう! ほんとにゆずさんのタマゴ? いつヒナうまれるろう?」と、まじまじと見入って目をキラキラさせている。雛が生まれるのを期待して、画用紙に卵とゆずさんの絵を描いて、みんなで名前を考えることにした。ああでもない、こうでもない、意見色々、真剣に考えて楽しそう。卵はというと、今も卵のまま、大切に保管している。子どもたちとゆずさんは、共に成長していく仲間なのだ。

～オープンアトリエ～

アトリエ一周年記念時に、オープンアトリエを開催した。オープンアトリエはアトリエメンバーだけでなく、小学生から高校生なら誰でも参加できる、アトリエのお祭り。二十名をこえる子どもたちが集まってくれた。この日は、室内だけでなく、ガレージやサンルームも開放して、絵を描くスペース、工作スペース、お店やさんスペースなど、アトリエの空間を一杯使って、子どもたちのためのお祭りだ。メンバーでつくった作品をオークションしたり、様々なお店を出す。絵描き屋さん、お弁当屋さん、うどん・おでん屋さんなど、粘土や紙類で工作した作品をアトリエ通貨を使ってやり取りする。基本的に全て子どもたちで行うことになっており、受付もアトリエ銀行も、オークションスタッフも、全てアトリエメンバーが担う。おやつづくりも楽しみのひとつ。好きなトッピングができるパフェを作ったり、メロンソーダもお好みの量で混ぜてつくり、粉と卵を混ぜ合わせてパンケーキを焼いたり。これもアトリエ通貨でやり取りする。足りなくなったら、銀行から借りることもでき、銀行員はお金を増やしている子のところへ行き、所得税を集め、足りない分を補う。目指すは小さなまちづくり、子どもたちの王国なのだ。



みんなでアイデアを出しながら進めていくオープンアトリエ

～おやつは心の栄養～

アトリエでは、おやつ専用の冷蔵庫を用意している。子どもたちはいつでも自身の好きなタイミングでスナックや

アイス、チョコや飴、お煎餅、ゼリーにグミなど、自由に合計三つ選んで休憩することができる。
気分が乗らない子や、学校帰りで疲れている子、絵を描いたり、つくったりしていて、集中力が切れたり、他の子と意見がぶつかったりしてうまくいかない時にも、おやつは大事な気分の切り替えにもなり、子どもたちにとって心の栄養となっている。

～雪はケチャップ風味～

学校が冬休みに入ってすぐ、雪が積もった日があった。
「ここにきたら、だれかおるかなとおもってきた!」と、第一声。家にいても一緒に雪で遊んでくれる人がいなかったようで、雪の中、友達を求めて歩いてアトリエに来た子がいた。
雪だるまを何個もつくったり。大きさを競ったり。段ボールでソリをつくって滑ってみたり。雪合戦では雪まみれになりながらも、子どもたちの笑い声がずっと響いていた。
ケチャップを水で薄めて、雪に絵を描いてみた。ちょっと舐めてみると「ケチャップや～!!」と大笑い。
記憶に残る特別な日になったようで、今もその時のことを冬になると思い出して嬉しそうに話してくれる。



学校も学年も違う子どもたちが思い思いに創作する

～スイカ割りとフリートマト～

夏になるとアトリエメンバーの保護者さんから家庭菜園のスイカをいただいたり、大家さんの畑からもやってくる。スイカが集まってきたら、子どもたちと夕方に外でスイカ割りをする。長い夏休みのお楽しみのひとつ。
夕方でもまだ暑い中、汗だくになりながら、ガレージにブルーシートと新聞紙を敷いてスイカを置き、手拭いで目隠しをして、順番に挑戦していく。これが、なかなか割れない。周りの掛け声とは裏腹に、あらぬ方向に棒を振り下ろしては、みんなで大笑い。目隠しを外して、悔しい表情も、すぐに次また挑戦したくて笑顔になる。子どもたちは全身を使って遊び学ぶ天才だなあと感じる瞬間。
割れてくると、よく熟れた真っ赤なスイカに歓声が上がります。スイカは長い時間外に出されてすっかり常温になっているが、自分たちで一生懸命割ったから食べられる格別の味のようなのだ。
アトリエには庭がないが、鉢植えでミニトマトを育てている時があった。アトリエメンバーは自由に食べていい、こちらも夏の楽しみ、おばあちゃんちのような居心地の夏休みのアトリエ。
アトリエで生まれる風景のひとつひとつが、ひとりひとりの心の原風景となって、絵画のように描かれて、大人になっても記憶に残る体験になればと願っている。

そんなアトリエには夢がある。

いつかはお庭のある家を見つけて、草花や木々、小さな畑にピザ窯なんかがあって、動物もいて、子どもも大人も一緒に過ごせるアトリエをつくりたい。外で育てた野菜や果物で料理やお菓子づくりをしたり、五感を使って体験できるような場所を実現できればと思い描いている。お庭で春の草花をスケッチするような水彩画教室をして大人も子どもと一緒に描いたり、子どもたちが外で木材を使った工作をしたり。最初は子どもたちの居場所づくりとして始めたアトリエも、日々子どもたちと関わっていて気づいたことがある。私はアトリエで生まれる「風景」そのものをつくりたい、ということだ。

描くこと、つくること、創作が中心にあって、そして草花や木々、動物、子どもも大人も集まって共存し響き合っている心に残る風景を創出していきたい。

しかし、一人ではできないことでもあり、物件との出会いも重要なので、全て縁によるお導き次第ではあるのだが。



子どもたちが自由に絵を描いている窓ガラス

かわむら あい

いの町出身 美術作家

アトリエについては Instagram の atelier_ironoie へ



主に水彩絵具を用いて、色の表現による制作をしている。2019年アートフェア「ART FORMOSA」台湾 台北、グループ展「アートアニュアル」香美市立美術館、2018年個展「River Waltz」いの町立紙の博物館、等。京都造形芸術大学（現 京都芸術大学）環境デザイン学科ランドスケープデザインコース、嵯峨美術大学短期大学部美術学科日本画コース卒業。

二〇二四年に読んだなかでいちばん 大好きな本はこれです

山中 由貴

紙の右端をもって、トンボ（折りや断裁などのために、ページの外側に印刷された十字形の目印）がぴったりに合うように左端に添わせる。母さんの骨べらを折り山に沿って動かし、ぴしりと折り目をつける。

これで一折り。二つ折り判だ。紙の向きを変える。右端を持って、左端に合わせる。厚みが倍になり、ほんの少し折りづらさが増す。母さんの骨べらにかけた力を、考えるのではなく、無意識に調節する。ぴしりと折り目をつける。二折り目。これで四つ折り判。

『ジェリコの製本職人』二四ページより抜粋

本をつくる過程で、印刷された紙をページが正しい順になるように折り畳む作業を「折り」というそう。一枚の紙に何ページ分か印刷したものを、一ページ大になるまで折っていく。折られたページを折り^{おちよう}丁といい、それを重ねて端を断裁し、表紙をつけて一冊の本になる。

今は機械にかけて短時間で大量に作業できるけれど、一九一〇年代のオックスフォード出版局、ジェリコにある製本所では、女工たちが一枚一枚手作業で「折り」の作業をしている。『ジェリコの製本職人』はその「折り」のシーンからはじまる。

ピップ・ウィリアムズの前作『小

さなことばたちの辞書』は、出版局の辞書編纂室^{へんさん}で何巻にもわたる辞書を製作する人々、そして主人公の少女の成長を通じて、辞書に載らないことばのおもしろさ、大切さに気づかせてくれる物語だ。

『小さなことばたちの辞書』があまりにも素晴らしすぎて、第八回〈山中賞〉に選んだのは三年前のこと。そのご縁で訳者の最所篤子さんともお会いすることができた。

その後、パレスチナ・イスラエル戦争が起り、ガザ地区の被害が報道され、そして報道はやがてしだいに下火になっていった。最所さんはXで「#ガザ翻訳」とハッ

シユタグをつけて、戦地ガザの被害者のポストを無償で翻訳しつづけた。そこには、ときに戦火によって命を落とした子どもたちが、赤ん坊が、生き残った家族に抱かれて映っていることもあった。

そんななか、同じ著者の『ジェリコの製本職人』が翻訳・刊行された。訳者は変わらず最所篤子さんだ。前作と同じ出版局の製本所で働く女性の物語で、『小さなことばたちの辞書』とは姉妹編となる本だ。

ベギーは双子の妹モードとともにジェリコにある製本所で働く女工のひとりで、ページに何が書かれているかを読むのが好きだ。折っていくページに記されているのは、文章の断片でしかない。それを、ページを折るわずかな間にこっそり読み、あるいはよれたり破れたりして不良品になった折り丁を持ち帰る。それは同じように製本所で働き、若くして亡くなった母親の癖でもあった。

大学で学びたいという夢を持ち

ながらも障害のあるモードをひとりにできず、ペギーたちは貧しく暮らしていたが、第一次世界大戦が勃発し、単調な生活は変わっていく。

オックスフォードにはベルギーからの難民が列車で到着し、難民女性たちは製本所で働くようになる。難民のひとりであるロッタはモードと絆を深め、ペギーは負傷兵の身の回りの世話をする奉仕活



動をするうち、あこがれの女子大生、サマーヴィル・カレッジに通うグウェンと親密になっていく。

物語には、VAD（篤志救護隊）

として戦地で看護の手伝いをするティルダや、出兵して戦死する者、ひどい怪我を負って悪夢に悩まされるバステイアンなど、戦争で人生を変えられてしまった人が多く描かれている。なかでもベルギーからやってきたロッタの苦しみは、あまりにも印象的だ。ルーヴェンでの虐殺や図書館の焼失など、ベルギーではドイツ軍の侵攻によって、多数の犠牲が出た。

最所さんはガザの声を毎日のように聞きながら、どんな想いでこの物語を翻訳したのか。物語で書かれた第一次世界大戦から百年以上たっても戦争を繰り返している、この世界……。

しかしまた物語には、戦争によってさえ減ほすことのできない、力強い意志が描かれてもいる。それは家族や愛する人と囲む食卓であり、学ぶことへの渴望だ。

そこに生活していく人々がいるかぎり、人は嘔きあい、泣いたり怒ったりし、慰めあい、笑いあう瞬間も必ずある。真実を知りたいと欲し、記された文字の意味を正しく知るためにことばを習い、友情や愛の意味を学び、その集大成は本をつくり後世に残していく人々の地道な作業によって、後世に受け継がれていく。

ペギーも大学入学を目指して学ぶことに熱中していく。古典ギリシャ語の習得に苦戦するペギーは、図書館の本を投げつけたくなる衝動をなんとか抑える。私の大好きな場面だ。

その章の余白に何か書き込みがあるのに気づいたのは、本を閉じようとしたときだった。鉛筆の走り書きをなんとか解読する。『さすがギリシャ語、わたしにはちんぷんかんぷん』と書いてあった。その下には、別の筆跡で『同じく』とあり、さらにその下には、また別の筆跡で『これ意味あるの？』と書かれていた。

『ジェリコの製本職人』四〇二ページより抜粋

同じように勉強に苦戦する受験生たちの愚痴。学ぶことはひとりの苦行ではないと知らせてくれる、ささやかなエピソード。

そんなふうには、「学ぶ」はつづいていく。貧しさも、争いも、だれにもその火を消すことはできない。そこに記す人がいて、本をつくり、それを手にして、学び、受け継いでいく。希望を。願いを。

ということ、第十二回〈山中賞〉に、『ジェリコの製本職人』を選んだことを報告します。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。

TSUTAYA中万々店の書店員なましんぶん編集長としてXやっています。

好きな本について喋るときだけ饒舌になります。

いつでも どこでも

自然観察

坂本 彰

私にとっては、少々ショッキングな執筆依頼をいただいた。依頼された方は「なかなか一般の方には聞きなれない『自然観察指導員』制度のことや自然観察会のことについて、書いて欲しい」という。毎年十回を超す観察会を開催し、自然保護の取り組みにおいてもそれなりに発信し活動してきたつもりであるが、やはり一般の方には聞きなれない存在なのだろう。一般の方に知ってもらおう絶好の機会と思い筆を執ることとした。

自然観察指導員は、公益財団法人日本自然保護協会が設けている制度である。十八歳以上で、協会が開催する講習会を受講し、協会の会員になれば自然観察指導員として登録することができる。名称は指導員となっているが、私は自然を観察するのに「指導」という言葉はなじまず、自然を観る人たちの気づきを助け、身の回りの自然の解説をする、そういった役割を担っていると考えてい



川の生きもの観察会に参加された皆様
(高知市宗安寺の鏡川)

る。自然観察指導員の活動にはいくつかのキャッチフレーズがある。その一つが「いつでもどこでも自然観察」である。自然観察はどこか特別な場所に出かけていなくても、普段利用している公園や通学路でもできますよという意味で、この言葉を使っている。例えばこの時期、草むらで悪さをする「引っ付き虫」。植物が種子を散布する方法はいくつかあり、その中で動物の体に付着して散布する方法を付着動物散布と呼ぶ。この付着動物散布で運ばれる果実や種子を、一般には「引っ付き虫」と呼んでいる。この引っ付き虫をよくよく観察すると、その引っ付き仕組みはいろいろあって面白い。返しのある刺で衣服に突き刺さるもの、ヘアピンのように毛にはさまるもの、フツ

ク型の刺で繊維に引っかかるもの、粘液で引っ付くものなどなど、その戦略・仕組みはいろいろである。この例のように、日ごろから心がけていれば、散歩や通勤の途中などどこでも観察し、自然を楽しむことができる。

もう一つのキャッチフレーズが「自然観察からはじまる自然保護」である。自然を観察することにより、身近な自然の価値を知り、それを守っていかうとすることが自然保護の第一歩になるという考え方である。

観察することによって自然への理解を深め、身近な自然を守り育ていくことから、自然保護の活動が始まるという発想である。ところがこれがないかなが難しい。特に最近、人の手が加わらなくなったために、希少な植物が消滅し、多様性が失われていく事例が少なくない。里山、里地の自然がそれで、適度に人の手を加え続けて行かなければならないのだが、高齢化や人口流出に伴い、管理放棄となつてこれまでの自然が失われていく場所が多くなっている。開発に反対するだけでは、自然が守れない状況になっているのだが、観察から実践への道筋は厳しいのが現実である。

県内に在住する自然観察指導員で組織している会が高知県自然観察指導員連絡会である。指導員ではないが自然観察を楽しもうという方も加

入しており、会員数は六十五名ほどである。活動の柱はやはり自然観察会で、年明けの春の七草観察会に始まり、晩秋の蛇紋岩地の植物観察会で一年を終わる。植物を対象にした観察会が多いが、川の生きものや旅をする蝶として注目されているアサギマダラ、鳥の渡りを対象にした観察会も開催している。以前は干渴の生きもの観察会なども開催していたが、その分野の指導員や参加者が少なく、継続した取り組みになっていない。昨年は二十五年ぶりに高知県で指導員講習会を開催し、指導員のメンバーも大きく増えた。植物分野以外を得意とする会員も入ってきており、今まで以上に幅広い分野で観察会を開催し、市民の皆様が身の回りの自然に親しむ機会をより多く作っていきたいと考えている。

高知県自然観察指導員連絡会ホームページ
<http://nkocho.html.xdomain.jp/index.html>



さかもと あきら

一九四八年 安芸市生まれ。
高知県自然観察指導員連絡会代表
世話人

「ファンテナ」 泳げドラゴン〈入水編〉



下尾 仁

文化高知No.237「泳げドラゴン〈準備編〉」の続きになります。

店にやって来た彼の名は森君。自転車で日本一周中、しかも自転車は見たこともない三輪車。そして彼が手に持っていたものに驚いた。この日から半年前、これまた自転車で日本一周していた丸山君という青年が、僕の店じりぜんじゆカフェに五日間泊っていた。出発の日、自分が面白いと思っていた旅人にバトンのように渡して繋いでいこうと授けた、キャッシュレス決済・ペイペイの旗で作ったサコッシュ（小型のバッグ）であった。

丸山君に「これ（サコッシュ）を持っていけば分かる」とだけ言われて店にきた森君。サコッシュが次の旅人に繋がれて帰って来た嬉しさ、明日仁淀川を下るタイミングで店にやって来た青年。これは面白すぎる。高知には何日くらい滞在予定なのか聞き、来店二分で仁淀川下りに誘った。さすがサコッシュを持ってきただけはある。森君はキョトンとしながらも「僕も行っていいならぜひ」と応えてくれた。ドラゴン（川下りのために筆者らが手作りした乗り物）は二人乗りだが予備でサッポを持っていくことになっていた。この問題は無い。では前夜祭だと、ドラ

ゴンの話、森君の話などをしながら酒を酌み交わした。森君は神奈川県出身で三十歳。まず普通のサイクリング車で北海道を目指して北上。北海道を一周し日本海側を南下、九州、沖縄と旅をして沖縄で自転車屋さんがぶつ壊れ、たまに三輪車に一目惚れし購入。そして丸山君と出会い、ペイペイサコッシュを託されて高知の僕の店にたどり着いた。この時、旅を始めて一年半のこと。しかもYouTubeをやっている。川下りの撮影もしてくれている。素晴らしい。明日の朝も早いので早めにお開きに、朝六時半に出発と伝えて眠りについた。

さあ朝だ!! 天気は晴天、絶好の川下り日和。ちかM君（川下りの相棒）の待つ仁淀川の波川公園に向かった。少し遅れてドラゴンを載せた軽トラでやって来たちかM君に森君を紹介すると、これは面白い展開ですねと森君の参加を喜んでくれた。出発地点・いの町の「くらうど」に到着し、さあ十二年前の忘れ物を取りにいこうとドラゴン入水。せっかくなのでペイペイサコッシュをドラゴンの後方に旗のように取り付けた。かっこいいドラゴンは二人乗っても安定している。これ

ならいけるぞと入水して五分後、一発目の激流ポイントですぐにコントロールを失い撃沈。ひっくり返ったドラゴンにしがみつき、流れの弱くなる所まで身を任せるしかない。流れの弱い所でドラゴンを立て直したが、大事な首はもげ、舵取りで作ったオールも紛失。かろうじて首は確保できたのとオールも予備があったので事なきを得た。それから流れの速い所と緩やかな所を繰り返しながら海を目指した。お昼ごろ、波川公園に到着。出発地点のくらうどから波川公園までは車だと十分弱かった。ここで一度川から上がり昼食をとり、その後再び川に戻って今日のキャンプ予定地・八天大橋を目指した。ここからは緩やかな所が多く、当初の計画通り、ゴミの気分になりゆつくりゆつくりと流され、八天大橋に着いたのは午後三時四十五分。約十キロを七時間で下り、一日目は終了。応援の仲間も集まり、テントを張り、買い出しも終えて宴が始まった。周りにはほかにキャンプをする人もおらず、エレキギターなどもかき鳴らし盛り上がった。酒も入った僕は疲れもあり、先に自分のテントに入って寝ることに。しかし応援隊の宴は続いている。時計を見ると深夜一時を回っている。明日もあるので、ちよっときつめに「静かにしてください」とお願いし、やっと深い眠りにつけた。

二日目、この日からちかM君の奥さんも参加することに。朝七時半出発。海までは約五キロ。春野にある新仁淀川大橋までは激流が多く、朝イチから転覆。ドラゴンを起こすと大事なサコッシュがない。なくなったものは仕方がないが、旅人リレーは終わってしまった（今頃どっかの無人島に流れ着いているかな）。気を取り直して再びスタート。真夏の日差しを顔面に浴び続け、着実に海に近づいていった。そして出発から約五時間。お昼十二時十九分に無事海に到着した。距離にして約十五キロ、二日間合計十二時間の大人の冒険は終了。各々帰路についた。僕はクタクタだったが、森君はせっかくなでひろめ市場に行ってきた。次々と行って街に繰り出していった。次の日の朝、起きて来た森君に「何か面白い事あった?」と尋ねると、ひろめ市場で、日本一周の足しにしてと出会った人から一万円、二万円、三万円、計六万円を貰い、朝まで飲みで連れて行ってもらったとのこと。「高知やばいところですね」と高知のことが大好きになったみたいであった。そして森君は、僕の店で販売しているはりまや橋の妖精ゆるキャラ「はりまとやばし」のサコッシュを手に取り、これを旅人に繋げていきますと言って購入し旅立っていった。さあ次はどんな旅人がやってくるのか、ドラゴンの川下り旅は終わったが、これからも楽しみは続いている。

僕らの川下りが気になってくださった方はYouTube「泳げドラゴン」で動画が見られます。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

新・祝祭音楽劇

「小さな星の王子さま」

―制作の現場から―

高知市文化振興事業団では、全国の公立文化施設の活動を支援する一般財団法人地域創造の助成を受け、「共生社会の実現に向けた舞台芸術創造事業」という事業を行っています。この事業では、障害の有無や社会的立場などの枠を取り払い、参加者の個性を活かした形で参画できる舞台芸術作品を制作・上演することと、様々な立場の人が経験や価値観、学びや喜びを共有し、劇場を拠点とした共生社会の実現を目指すものです。昨年度はこの助成を受けて、十一年ぶりの市民ミュージカル「*Gift of Life*」にぎやかな植物園」を上演しました。



初演時の様子

成長する物語です。
この公演にあたり、演出家の藤岡武洋さんは以下のコメントを残しました。

「障害者はナイモノとして扱われているんじゃないだろうか」ある施設に勤める方から寄せられた言葉に私は驚き、自身にある心の壁を改めて認識した。文化芸術、とりわけ演劇は集団創作であり、身体表現や発

語によって俳優と観客がイメージの共有を図る特殊性がある。そういった事情に甘え、障害のある人に演劇はできないと勝手に「ナイモノ」にしていたのではないか。（中略）障害のある人、ない人が共に経験や価値観、困難、喜びを共有し、あらゆるアプローチを試みることが求められている。この営みは効率性とは無縁のものだ。目に見える、手に取って所有できる、数字に表せるものではない。だが確かにここにある！と感じられる大切な財産だ。はつきりわからないからこそ大切でおもしろいのだ。

二〇二一年の初演時はコロナ禍による座席制限があったものの、県立美術館ホールを2ステージ完売する話題作となり、薬工ミュージアムの協力のもと、かるぼーとでの再演に向けて動きはじめました。

再演にあたり、演出家の藤岡さんから「戯曲を改めたい」と相談がありました。初演の戯曲は原作に沿った構成でしたが、そこからさらに踏み込んだ作品にするために、大阪の劇団「いちびり一家」の代表で、大阪芸術大学舞台芸術学科の講師を務める阪上洋光さんに再構成と執筆をお願いしました。阪上さんは劇団活動と並行して、知的障害を持つ方々との劇づくりに積極的に携わっている方で、「星の王子さま」をどういつ

た視点から戯曲化するか、演出・制作陣と打ち合わせを重ね、難産の末に、原作から現在の社会を映し出し、その社会に生きる小さな個人の想いを集めたような素晴らしい戯曲が出来上がりました。

現在ではできあがった戯曲をどう立体化するか、藤岡さんを筆頭に、十三歳から八十一歳までの二十五名の出演者、サポーター、ハナカタマサキさんをはじめとするミュージシャンや多くのクリエイションスタッフと共に稽古を重ねています。現代の高知の劇場でしか生まれない、奇想天外で飛びきり自由な「星の王子さま」にぜひご期待ください。

新・祝祭音楽劇「小さな星の王子さま」

日時：3月9日（日）14時開演

会場：高知市文化プラザかるぼーと（四国銀行ホール）

料金：2,000円（当日は500円UP）全席自由

※未就学児および入場の際に介助が必要な方の介助者1名は無料

●チケットは、かるぼーとミュージアムショップ、ローソンチケット、チケットぴあで好評販売中



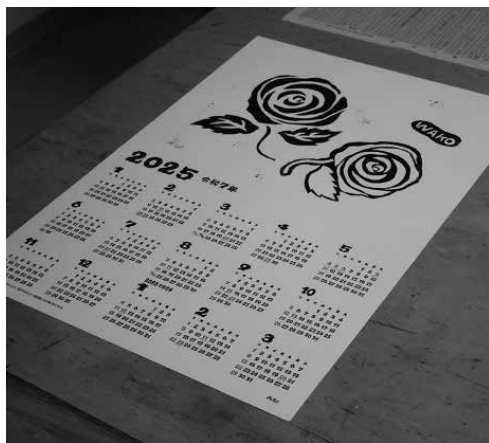
高知市文化振興事業団 10～12月の事業から

高知市立中央公民館事業「市民講座」

十月～十二月に高知市立中央公民館事業「市民講座」を実施しました。今回は「木版画カレンダーをつくろう!」、「芥川龍之介の作品を読む」、「香りのある日々〜ハーバルライフを始めよう〜」、「チョコを愛するあなたのために」、「かるぽーと周辺の時代の移り変わり」と多彩な内容の五コースでした。

「木版画カレンダーをつくろう!」

全四回の講座では、下絵作りから始まり、下絵を転写した板を彫刻刀で彫り、できあがった版木を刷ってオリジナル



木版画カレンダー

カレンダーに仕上げました。半数以上の受講者が彫刻刀を持つのは小学生のとき以来という中でスタートでしたが、いざ始まってみると、講師の山中雅史先生のていねいな指導により、集中して作品制作に励んでいました。講座最終日には、受講生が順番に作品制作の難しかったところや、こだわった部分を発表し、受講生同士で完成した作品を交換し合い、大いに盛り上がりました。また、受講生の中には二十年前に山中先生に木版画を習った方がおり、当時を懐かしく思い出し、喜んで受講していました。

「香りのある日々〜ハーバルライフを始めよう〜」

まるふく農園の楠瀬健太さん、妹の坂本裕美さんにハーブを日常の暮らしに活かす方法について三回の講座で教えていただきました。

初回は、楠瀬さんオリジナルシロップの爽やかなモヒートやカラフルなハーブティーを飲みながら、様々な種類のハーブに触れ、特性や利用方法などを学びました。二回目は、ガーデニングにおすすめのハーブを使った寄せ植えです。たく



ハーブ寄せ植え

さんの種類から自分好みの香りや形の苗を選び、バランスを考えながら組み合わせ、いくつか作業はワイワイ楽しく賑やかな時間でした。最後の回は、坂本さんのハーブを使った料理教室です。乾燥ではなく生の葉でブーケガルニを作り、これを使ったポトフ、食用の花を飾った色鮮やかなハーブのカナッペ、フレッシッシュハーブバターを添えたフォカッチャなど華やかなメニューが並びました。手軽に作れて自宅のメニューのレベルが上がると大好評でした。毎回ハーブの香りに包まれた癒しの時間を過ごすことができ、ハーブの魅力を皆さんに感じていただけた。

会場 高知市立中央公民館
参加者数 一〇三名（五コース合計）



高知を撮る

第31回写真コンテスト入賞作品 「芽生え写真教室～昭和34年」 (昭和34年5月5日) たどころ むつみ

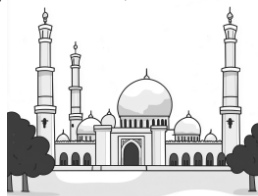
戦後、カメラが普及発展を遂げブームとなった。当時、こどもの写真教室が開かれた。これは、先生の指導でお城を真剣に撮っている光景。参加者の使用カメラは35ミリの普及材「フジベット」です。(撮影場所：高知公園石段)

昨年九月に三十七年務めた会社を定年退職し、これまでにやり残したことに次々チャレンジしている。その一つが海外留学。この歳で単独海外に留学するのはなかなか勇気のいることだが、仕事の呪縛から解放された勢いで日本を飛び立った。

留学先は、田安ということもあり米国は避けた。ルーマニアが日本人でない国を探索とかなり限られ、必然的にドバイへ。周りは、「アラビア語じゃないの？英語で大丈夫？」と心配された。

インドでは九割の国民が英語がしゃべれるように、ドバイもタクシーの運転手さんも露店商のおじさんも英語は結構流ちょうで、大学を出ても英語がしゃべれない日本人とは大違いだった。留学中にナショナルデーという

チャレンジ



風俗歳時記

国民の祝日があり語学学校が四連休になってしまったため、ここぞとばかり異文化や珍しい場所を見て回った。地上828メートル世界一の超高層ビル「ブルジュ・ハリファ」に上ったり、ヤシの木を象った人工島「パーム・アイランド」を見下ろしたり。他の酋長国にも足を延ばし、世界一美しいと言われるグランドモスクをイスラムの正装であるアバヤ

を着て訪問。知り合いは誰もいないので現地人に溶け込んだ。チャレンジするということは、自己満足だけではない。仕事だけを猛烈にやってきたサラリーマンが、仕事を辞めた途端に生き甲斐を失ったり、精神的に参ったりという話はよく耳にする。特に、管理職やバリバリ仕事をしてきた人ほど、定年後のダメージは大きい。それならば、定年の少なくとも数年前から、定年後の人生についてコミュニケーションする必要があるのではないかと。日本人の健康年齢は、厚労省の最新(2022)のデータで男性72・57歳、女性75・45歳である。それを考えると六十代をいかに充実して過ごすかが、人生の豊かさに大きく関わる。大それたことをしな

(立花香)

こどもから大人まで誰もが楽しめるコンサート♪

かるぽーと こども音楽会

2025年 3月2日[日] 高知市文化プラザかるぽーと
【四国銀行ホール(旧大ホール)】 高知市九反田2-1

開場 13:30 開演 14:00

前売り 一般 800円 高校生以下 400円
当日 一般 900円 高校生以下 500円

0歳から入場OK

演奏中の
出入りOK

問 公益財団法人高知市文化振興事業団 ☎088-883-5071

風伯

人生で一番楽しい日

するとどうだろう、ある調教師はすぐに大きな花束を持ってきた。現場の皆の前で記念撮影などする。A係員は名物の饅頭をくれた。素朴で懐かしいおいしさ。B係員は保湿系の化粧品をくれた。最近顔の老化が気になり欲しかったもの。馬診療所の年長者からは気の利いた湯呑みをもたらった。「これからは楽しいことばかり」とのご指示。

退職の日が決まった。四十数年毎月給料をもらっていたのが、なくなる。体調、物価高、親の介護への不安と焦燥。この世の終わりが。勤務最終週、周りに辞めますの声をかけていく。初老の凡人獣医のことなど誰も気にかけてはいないだろう。棧橋の旧競馬場から務めていた職員は、気が付けば私一人になっていた。

そして勤務最後の日。従事員連名で大きな花がこをいただいた。クッキーをくれた男性もいた。前から一度食べたかった銘柄。自宅では娘が花束を抱いて待っていた。なによりうれしかったのは好意のたくさんの声がかた。レース前のミーティングでも花束贈呈あり調子にのって挨拶し「皇室と馬と桜は縁が深い。パドックに立つ黄金ヒバは昭和天皇ゆかり。この木は種馬所跡地の林業試験場でお手まき行事の際、周りを彩った記念樹の一本。パドック傍らには桜もあり、馬もいる。三拍子そろってるのはこの職場くらい。みなさん誇りをもって仕事をしましょう」。最終レースで騎手にお別れを告げたら「最終レースで言うたちなんもできん。胴上げするかえ」との気遣いのたくさんの好意をもたらった。自分の職場を見直した。とてもやさしい気持ちになった。人生で一番楽しい日。

(三)

第77回 高知市展

高知市展は市民誰もが参加できる
アンデパンダン（公募無審査）展です。
あなたの力作を展示してみませんか？

絵画（洋画）

日本画

書道

先端美術（立体）

彫刻

陶芸

工芸

写真

ペン字

デザイン

▶ 会場

高知市文化プラザかるぽーと
BILBO ギャラリー（市民ギャラリー）

▶ 搬入

2025(令和7)年
5月18日(日)・19日(月)
午前10時～午後5時

▶ 出品料

1部門制限点数内
一般 1,500円
学生 1,000円

※出品についての詳細はホームページ
<<https://www.kfca.jp/kikaku/shiten77/>>
をご確認ください

公益財団法人高知市文化振興事業団
☎088-883-5071

今号の表紙

アカイト

岡村 麻佑

バレンタインの時期なので赤い糸で運命的なイメージをデザインしました。

(おかむら まゆ／
龍馬デザイン・ビューティ専門学校1年生)

新・祝祭音楽劇 小さな星の王子さま

2025
3/9 日

14時開演

優先入場13時15分／一般入場13時30分

会場◎高知市文化プラザ かるぼーと 四国銀行ホール 高知市九反田2-1
料金◎前売2000円(当日2500円) 全席自由 ※未就学児および入場に際して介助が必要の方の介助者1名は無料
主催◎お問い合わせ◎公益財団法人高知市文化振興事業団(088-883-5071) 共催◎高知県 助成◎一般財団法人地域創造
協力◎高知市文化プラザ共同企業体、高知ミニシアター、NPO 協賛(高知県障害者文化芸術活動支援事業、オーチャード高知市と点字の図書館、国際障害者交流センター、ヒューマンライ



私はいったい
誰の夢に
不時着したんだ？



イラスト：ハズカタマサキ